



元気っ子

No 327 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

先月の元気っ子では、ながさわ保育園で実践している「見守る保育－藤森メソッド－」が、「ただ見ているだけ」「放任」といったものではなく、「子どもたちを徹底的に観察・理解をし、その発達過程に必要な援助をするもの」であることをご説明させて頂きました。そしてこの保育方法を通じて、子どもの主体性や非認知能力を育むことがねらいの一つです。

保育において「子どもの主体性」が重要であることは以前から周知されていることですが、様々な調査において、日本人は主体性が失われがちだと言われています。では、一体、どこでどうしてこの主体性が失われていくのでしょうか。

元々、赤ちゃんは好奇心旺盛であり、主体性をもって生まれてきます。やりたいことを自由に選択し、行動しています。にもかかわらず、小学校高学年や中学生くらいになると、急に「言われたことはしっかりとできるが、自分のやりたいことを主張したりすることが苦手になる」そうです。

教育アドバイザーの工藤勇一氏によると、こういった姿は多くの場合、小さい頃からの親や保育士、先生等、大人のお節介によって作られると言います。例えば、自分でズボンを履きたいと言っているのに、大人が待てずに履かせてしまう、朝に遅刻するのを心配し、毎朝起こしに行ってしまうこと等が挙げられるそうです。子どもたちの主体性はそんな小さな出来事を積み重ねていくうちに削がれていくこととなる言います。

こうしてお節介に慣れた子どもの日常では、「お母さん、次は何をやればいいのか?」「先生、トイレ行ってもいいですか?」などといったセリフが頻繁に聞かれるようになります。また、さらに年齢が上がってくると、そのお節介が鬱陶しくなり、文句を言うようになります。そして上手い出来ないことが起こるたびに、人のせいや環境のせい、お節介（サービス）のせいにするのが当たり前になっていきます。例えば、勉強が分からなければ「先生の教え方が悪い」と文句をいい、クラスが上手いかなければ「担任がハズレだ」と批判します。親が「宿題やったの?」と声をかければ「今やろうとしていたのに、言われたからヤル気が失せた」と八つ当たりをします。

教育や保育、育児において大切なことは「生まれながらにもっている主体性を失わせないように進めていくこと」です。一度失った主体性を取り戻すためのリハビリは大人側に粘り強い忍耐力が必要になり、大変な労力が求められます。主体性には「自己決定」の繰り返しが不可欠ですが、これは学校や保育園だけでどうにかなるものではありません。家庭でも多くの場面で子どもの自己決定を促すことができます。例えば、朝着ていく服を自分で決める、休みの日にする遊びを選択する、いくつかのおやつを週の頭に渡して、一週間計画的に食べさせる（自己管理・自己決定）などです。きょうだいが居れば、意見の擦り合わせをしないとイケないので尚良いでしょう。

「見守る保育－藤森メソッド－」では「些細な事でも自己決定」を促します。是非、ご家庭でも実践していただければと思います。